
どらぼんっ！～ドラゴンたぬきのポン太郎

ごぼふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どらぽんっ！〜ドラゴンたぬきのポン太郎

【Nコード】

N0680BA

【作者名】

じぼふ

【あらすじ】

ドラゴンとたぬきのハーフであるポン太郎・ザ・ドラゴン。

彼は、ドラゴンと様々な種族のハーフである姉達、そして純潔種の妹と共に、それなりに平和に暮らしていた。

しかし、見た目はたぬき同然の彼を、妹は良く思っていないようです……。

どらぽん

大地のほとんどが枯れぬ森に覆われた世界、ノミネリア。

森は魔王の力で作られ、その中には凶悪な魔物達が彷徨っている。森と森の間にある狭い境界に押し込まれた人間は、何代にも渡り、魔王を討伐せんと戦士を送り込んできた。

魔王が死ねば森も魔物も消え去るが、時が経てば彼らは何度でも蘇った。

月と太陽の巡りのように繰り返すこの世界には、人間と魔物とドラゴンと、そしてたぬきが住んでいる。

[illegible]

『第一章 ドラゴンとたぬき』

「旦那。勘弁してもらえませんか。どうか。私も充分反省しております」

逆さ吊りのまま、頭の下には煮立った鍋という状況で、我は目の前の男に懇願した。

「うるさいクソたぬき。熱湯と俺の胃袋の中でたっぷり反省しろ。つうかたぬきの分際で何が我だ偉そうに」

だが、こんなにもかわいらしい我が頼んでいるというのに、我の尻尾を掴んでぶらさげている目の前の人間は、断固として我を食うつもりようだ。おまけに我の一人称にまで文句をつける。

大陸の端つこにある片田舎。うつそうと茂る森の中に唐突に存在するひらけた場所。通称小ハゲ広場において、我は男に対して再度説得を試みた。

「反省というものは後に活かしてこそですよ旦那。肛門から出た後では大地の栄養にしかありません」

「お前が世の中の役に立てるのなんざ、肥料になるぐらいのもんだ。人を散々おどかしやがって」

「あの表情はケツサクでしたな」

この世の終わりのような男の顔を思い出し、我は本能的な幸せに顔を歪ませる。

「……シメてから鍋に放り込んでやろうと思ったが、直接熱湯で溺れ死なせることにした」

すると男は反対に表情を消し、我の処刑方法をより一層残酷な方向へと推移させた。どちらにしろ食うという結論は変わらないらしい。

男はため息を吐くと、悲しげに首を振った。

「まったく、この森にドラゴンがいるって聞いてきたのに、何でこんな事に」

「いたではないですか、ドラゴン」

「アレはおめーが化けた奴だろ！」

我が前足で自らのことを指し示すと、男は大声を張り上げ、我の顔に唾を飛ばした。

つまりまあ、こんな状況になったのは、ドラゴンの噂を聞きつけてノコノコやってきたこの男を、我が二十メートル（単位は人間のものを拝借している）を越えるドラゴンに変身して脅かした。というところに端を発する。

男が悲鳴を上げ、腰を抜かし、命乞いをしたまでは素晴らしい流れだったが、急な突風が我の頭の上に置いてある葉っぱを吹き飛ばしたところで流れは変わった。

変身が解けた我は、哀れ男の魔の手に落ちてしまったのだ。

「しかしお兄さん、ここに住んでいるドラゴンが我でラッキーでしたよ」

「まだ言い張るか。ていうか何で呼び方変えた」

「他のドラゴンは強大で誇り高く、あと怒った顔が怖いです。お兄ちゃんの装備では傷一つつけられません」

「……さては気安く呼んで俺に愛着を持たせようって腹だな。ふん、ドラゴンなんて所詮羽の生えたトカゲだろう。誰が怖がるもんか」
「あつと兄様、そういうワイバーンみたいな亜竜と本物のドラゴンを混同するような発言はうちの妹が……」

言いかけたところで、我は言葉を止めた。

空がふつと暗くなつたからである。

「妹だあ？ さりげなく家族がいることをアピールして恩赦を期待しようなんて狡い野郎だ。やっぱり今すぐ鍋に……ん？」

少し遅れて、男もそれに気づいたらしい。

「うおおお！？」

顔を上げ、彼は驚きの声を上げた。

太陽を背にし、上空から金色の鱗を持つドラゴンがゆっくりと降りてきたのだ。

体長は三メートルほどだが、その威風堂々とした姿は、我々を圧倒するには十分な圧力を放っている。

「ア、アグノ！」

我が裏がえつた声でドラゴンに呼びかけると、男は我らを見比べながら立ち上がった。

「な、なんだお前もたぬきか！ 二度も同じ手を使いやがつて！」
憤慨した男が、我をぶら下げたままもう片方の手で剣を抜いた。
「アグノ、ダメだ！」

男は剣の腹を正面に向けると、大上段でドラゴンを撲殺せんとする。

それに対してドラゴンは、すうっと息を吸い込んだ。
ボウッ！

「ギャー——！」

我が悲鳴を上げると、ドラゴンが口から炎を吐いたのは同時であつた。

それは男の剣を容易に溶かし、彼の頭をかすめ、その後ろの鍋へ直撃し、火柱をあげた。

——しばしの沈黙の後、男が自らの剣を確かめ、円形の焼け野原が形作られた頭を確認し、背後を向いた。

そこにはもはや鍋の痕跡などなく、地面には熱でできた窪みができている。引火した草たちが、ちりちりと音を立て燃えていた。

「ほ、本物の……」

男は最後に我の顔を見た。我はぶら下げられたままの姿勢で、深く頷く。

「本物のドラゴンだああ！」

叫ぶと、男は我を放り出し一目散に逃げ出した。

恥も外聞も投げ捨てたそのスライドは、ある種美しくもある。

それを見送りながら、空中で一回転、二回転。我は地面へと華麗に着地した。

両手を挙げ、十点満点。胸を張った我だが、ドラゴン……アグノが睥睨している事に気づき、びくりと体をすくませる。

「ア、アグノ。我は首が疲れているので、もう少し見上げやすくはしてくれないか？」

別に彼女に威圧されたわけでは、うん、決して無いが、我はアグノに控えめに提案した。

あくまで長時間逆さづりにされていた弊害である。

すると彼女の体が淡い光を放ちながら、するすると縮んでいくではないか。

さらに羽が縮み尻尾が縮み髪が生え、光が収まると我の目の前には、十三、四歳の少女が立っていた。

我のような術による変身ではない。竜が十歳毎に会得する、固有の形態変化である。

これは本人が細かい容姿を決められるモノではない。

だが、アグノの場合は抜けるような白い肌と、竜の時と同じように輝く金色の髪を持った中々の美少女の姿に変化していた。

服もちゃんと着ている、というのは貴兄らには残念なお知らせだろうか。

「何をしておるのじゃ」

とはいえ、縮んだとはいえ、少女の姿になったとはいえ、やはりドラゴンの威圧感は健在である。

ただしその古めかしい言葉遣いには効果がない。舌足らずであるし。

「いや、本能がうずいて、ちょっと人間をからかってやろうかと」
冷たく我を見下ろす彼女にたじろぎながら、我がしどろもどろに答えると、アグノはぐいと上半身を倒し、更に強く我を睨んだ。

「無様じゃ」

胸を貫く一言である。その心無い言葉に押され、我は前足で胸を押さえ一歩二歩と後退した。

そんな我の様子に、アグノは眉根を寄せ、口をへの字の曲げ、不快そうな顔をする。

「そなたのような兄など、わらわは認めんからな！」

そして叫んだアグノの体が光り、再び巨大なドラゴンへと変化した。

そうして彼女は、翼を大地に叩きつけるように動かし一瞬で空へと舞い上がった。その風圧に、我の体はころりと一回転する。

しかし事実なのだ、妹よ。

すごい速度で飛び去っていくアグノを腹ばいで眺めながら、我は心の内で呟いた。

我の名は、ポン太郎・ザ・ドラゴン。

最強の竜、ヴォルガー・ザ・ドラゴンと、普通のためきとの間に生まれた、おそらく世界でただ一匹の、竜とためきのハーフである。

どらどら

父との思い出は、主に彼の背中の上でまどろんでいた思い出と同義である。

父はたまに帰ってくると、金銀宝石を敷き詰めたねぐらで横になり、長い時は一週間ほどそのまま眠っていた。

我は父が帰ってくるとその背中によじ登り、分厚い皮膚の下で流れるマグマのような血流を聞きながら寝る。

それが大のお気に入りであった。

父はたまに意識を半覚醒させると、そんな我へと寝言交じりに話しかけた。

「ポン太郎や。お主は本当にたぬきだのう」

「そんなことはありません。ぼくは日々ドラゴン道をまい進しております」

それに対し、我も寝ぼけたまま答える。

まあ正気だったとしても、自分の言った事の内容が半分も理解できないような年頃だったので、恐らく発言に大差はなかったことであらう。

「恐らくその一人称がいかん。これから自分の事は我と呼ぶがいい」

「われ……われ……しっくりこないです」

「お前もそろそろ兄になるのだからな。威厳というものを持たねば」

「またふえるのですか」

父はドラゴンのくせに異種族の雌が好きという、とんでもない異常性癖の持ち主であった。

エルフやオークはもちろんラミアにハーピー、天使や悪魔、果てはたぬきまで口説き落とし、子作りを敢行していたのである。

「嬉しくないのか」

「姉さまただけで充分です」

なので、我には姉が沢山いた。種族も年もバラバラで、我にも全員の名前は把握できないほどの数が。

我は姉達の事が好きであったが、これ以上姉が増えられると撫でられ過ぎて腹の毛がなくなりそうだとも考えていた。

当時の我はアホであったので、妹というものは概念自体を知らなかったのである。

「そう言うな。この次はもつと凄いぞ」

言って、父はフンと鼻息を吐いた。床にちりばめられた宝石たちがごろごろと転がる。

「次の相手は魔王だ。お前にも魔王の妹ができるぞ」

「ほどほどにしてくださいね、父上」

我は母上がいつも言っているような口調で父上を窘めたが、結局それは無駄であった。

父上はそれから単独で魔王城に乗り込み、歴代最強と名高い女魔王ヴァトラスカと三日三晩死闘を繰り広げた。そうして、振り返ちにあって死んだらしい。

何事にも全力かつ正面突破で当たる父上らしい最期であった。

さて、父上が亡くなった後の事だが、我が母や姉達の母上達も、その末路については覚悟をしていたらしい。

彼女らは父上の巣にあった金銀財宝を売り払い、特に揉めることなくそれらを分配すると、それぞれ別に暮らし始めた。

その為、我は多くの姉達とは離れ離れになったが、それでも残った家族と寄り添って暮らしている。

森を抜けると、その中に木造の古びた家がある。

格子状の木枠の片側に薄い紙が張ってあるスライド式のドア。これを障子といい、両面に多少厚い紙が張られているのがふすまという。

だいたいこの二つで仕切られた、オリエンタルファンタスティック

くな風情をかもしだすこの家が、我らの住まいである。

そして我が出たのは、その裏手、庭方面であつた。

我は家に入るとき、大抵玄関ではなくこちらを利用する。

何故なら庭側には井戸があり、そこで足を洗ってから屋敷に入つた方が姉上の機嫌が良いからだ。

ただしそれも、濡れた前足をきちんと拭かなければ水泡に帰す。というか、より怒られる。

我が身震いをし、井戸の脇に張つてあつた水の中でアライグマのように前足を擦りあわせていると。

「ポンちゃん」

庭と家の境目、通称縁側から声がかかった。

我が振り向くと、そこにはキモノを着た女性がたおやかに座っている。

「あ、姉様！ 申し訳ありません！ 気づきませんでした！」

「いいの、お姉ちゃん影が薄いから」

井戸と縁側は少々距離が開いている。我が彼女に声を届けるには少々声を張る必要があつた。

しかしあちら側の声色は優しいものののに、我の耳にしっかりと届いている。とてもよく通る声をしていらつしやるのだ。

分量が多く若干野暮つたいが、黒く艶やかな髪。反射によって赤く光る、人を、もしくははためきを引き込むような目。

確かに存在感は無いが、一度意識してしまえば目が離せなくなる女性。我が姉様、ミユツケ・ザ・ドラゴンはそんな人だつた。

「姉様！ こんな日に外へ出て平気なのですか？」

我は急いで後ろ足も洗うと、点在する大きな石を踏んで縁側までたどり着いた。置いてあつた手ぬぐいで足を拭きながら、彼女に問いかける。

「うん、ちょっとだけなら平気だよ」

すると彼女は我の前足をすつと取り、手ぬぐいで優しく拭い始めた。

「そ、そうですか、それなら良いのですが」
指の間まで丁寧に拭かれ、こそばゆい。

私の足、ついでに水の跳ねた尻にまで彼女の手が伸びそうになったのでそこは固辞し、私は自らの足をしっかりと拭いた。

「それで、用事は終わったの？」

「え。ええ、はい」

姉様が問いかけるので、私は手ぬぐいを脇に置き頷いた。

どうやら彼女は私が遊びに出たわけではないと気づいていたらしい。

「じゃあお姉ちゃんとひなたぼっこしようか」

私の返答に満足げに頷くと、姉様は仔細を聞くこともなく、ぽんぽんと自らの膝をたたいた。

この上に乗らないか、という誘いである。

「あーっと……」

私は逡巡した。とても魅力的な誘いではあるが、我にも雄としてのプライドがある。

いい年をした男子が婦女子の膝の上でぐーすかと寝て良いものだろうか。

「いや、かな？」

「いえ、光栄です」

しかしあるっちゃある程度のそれが、姉様の悲しげな表情に勝てるはずもない。

我はもう一度足の乾き具合を確かめてから、顔を曇らせていた彼女の膝の上へと慎重に乗った。

獣の本能として前足で軽くふとももを引っかけてから、彼女の膝の上で丸くなる。

姉様は我が引つかった際少々くすぐったそうに身じろぎをしたが、我が定位置につくとゆっくりと背中を撫せてくださる。

暖かな日差しと姉様のひんやりとした手、そしてふかふかのふともも。

この素晴らしい連携に意識を保てる獣が居るだろうか。少なくとも我には無理だった。

そうして私の意識はあっさりと落ち――。

目を覚ますと、私の背には姉のぬくもりが残る着物が着せられており、体は灰だらけであった。

寝ぼけた頭でプルプルとそれを払おうとして、思いとどまる。

……これは姉様なのだ。

寝ぼけているわけではない。いや、数秒前までは確かに寝ぼけていたが、そうではない。

我が姉様、ミュッケ・ザ・ドラゴンはドラゴンとドラキュラのハイフなのだ。そして我に降りかかっているこれは、姉様の遺灰なのである。

まったくもって、我が父の見境のなさにはただただ感服するのみだ。

ハイフであるおかげか、ミュッケ姉様は太陽光にもある程度の耐性をもつ。

だが、今日のように油断してうとうとしていると、いつの間にやらこうして灰になってしまうのである。

どうやら気の緩みが太陽光への抵抗を下げてしまうようなのだ。

しかし嘆くことなかれ。彼女との別れは永遠ではない。

彼女は半分だけであるがやはり吸血鬼の為、復活の儀式をすれば、明日にはまた元気な姿で復活できるのだ。

だがしかしである。その儀式を行う為には、今の姿では都合が悪い。

我はそろそろと立ち上がり、灰を着物の上へと慎重に落とすと、前足を合わせて念じ、縁側から庭へ宙返りした。この際躊躇わないことが後の成功へと繋がる。

一回転する間に、私の体は現実の空間から切り離され、虹色に光

り輝く空間へと投げ出された。

それと共に我の体も光輝き、輪郭以外をあやふやにさせる。手が伸び足が伸び爪が縮み毛が抜け落ちる。手、足、と光がはじけ、その下から長く、つるつとした手足が現れる。

体に纏った光がはじける直前、その上に大きなリボンとスカートがつき、更にはヒラヒラとした服が現れる。

顔から毛が抜け髭が抜け、鼻面が引込み、寄ってきたカメラに我はウインクをした。

マジカルステッキでポーズを取って変身完了である。

「よし、と」

現実には一秒も経ってはいない。美少女に変身し庭に降り立った我は、靴を脱ぎ縁側に上がり直し、ステッキを置いて跪き、姉様の灰を彼女が遺した着物の上に集めだした。

姉様の復活に必要な灰は、最低で小さじ一杯分というリーズナブルであるが、集めれば集めるほど復活が早くなる。

更にその際、なるべく不純物が混ざらないように注意したい。復活の時間は大して変わらないが、埃にまみれた復活では姉様がかわいそうだからだ。

そのような理由で慎重に灰を集めた我は、それを着物で包んで目の前の障子を開けた。

するとそこは畳敷きの和室であり、その真ん中に置いてある黒檀の棺が、主の帰りを待っている。

我は棺桶の重厚な蓋を、美少女にはあるまじきがに股で開けると、その中に主であるところの姉様の遺灰を着物ごと放り込んだ。

それから部屋の中にある箆笥より短刀を取り出し、数度部屋を往復（この行為はただ決心がつかなかったただけなので儀式とは関係しない）。

その後で、我はついに自らの指に短刀を押し付けた。傷を深くしないようにそれをすぐに離すと、ぷつり、と血の球ができ、我は慌ててその血を棺桶の中に落とす。

灰の一点が黒く染まったのを確認すると、我は一息ついて自らの指をしゃぶり労わった。

普段ならいざ知らず、今のフリフリとした姿ならこの仕草も様になるう。姉様が鏡に映らないのでこの部屋にそいつた類のものが無いのがいささか残念である。

我はとりあえずその姿勢のまま、庭のほうに流し目を送ってみることにした。

するとそこには背の低い美少女が立っており、こちらを大氷竜パゴスのような目で見ていたが、それは幻覚なので無視した。

「貴方は何をやっているのポン太」

「姉上は幻覚ゆえ我には見えません」

幻覚が話しかけてくるのでそう答えると、彼女はズカズカと部屋に入ってきて我の脛を一蹴りする。

「あいだっ！」

脛に決して幻覚では済まされない痛みが走り、我は痛みとともに蹲った。

「貴方の大好きな姉上を幻覚にするとは良い度胸ね。それとも小さくて見えなかったと言いたいのかしら」

少女が我の顔を見上げる。その背後の影が揺らめき、まるで生き物かのようにうねうねと形を変えた。

それは角のねじくれた山羊。口の裂け過ぎたくじら。もしくは喘ぐドラゴンのようにも見える。しかし我にはその奇々怪々な光景より脛を蝕む痛みの方が重要ごとであった。

「こっ、好き過ぎて幻が見えたと勘違いした、という方向でお願いします……」

我は涙目で、自分の腹辺りに位置する姉上の顔を窺う。すると、彼女はそれなら良しという風に頷き、影を元の少女の形に戻した。彼女の名前はユマ・ザ・ドラゴン。この家に住む中では一番年かさの姉で、ドラゴンとキマイラという魔物とのハーフである。

キマイラとは何の因果か様々な生き物が合体してしまった者の総

称で、正確には一つの生物のカテゴリではない。

しかし姉上は自らをそう呼んでおり、彼女の真の姿……あれを見た私も、彼女をなんと呼んで良いのか分からない。

なので彼女を紹介するには、自称であるキマイラという名称を使うしかない。

今の姿はアグノと同じく、竜に備わる固有の形態変化で変化した姿である。

優しい大地のような豊かな亜麻色の髪と、冬の湖面のような灰がかった青い瞳。

小さな背丈と併せて、彼女の内面にぴったりの姿だと我は考えている。だが、本人は自分の姿をあまり気に入っていないようだ。

形態変化なので成長のしようがないのに姉上が自らの乳を恨めしげに揉んでいるところを、我は見たことがある。

「で？」

我がそんな失礼なことを長々と思っていることに気づいたのか。姉上は不機嫌そうに我を見上げながら問いかけてきた。

ここで「で？ とは？」などと問い返すと更に蹴りが飛んてくる。

二発飛んてくる。なので我は。

「自分の姿にうっとりとしておりました」

と正直に答えた。

「……そう」

ガス、ガス、ガス。

「あだっ、あだ、あだ！」

すると三発蹴られた。会話とはむづかしいものである。

「あ、姉様が灰になってしまわれたので、蘇生の準備を」

多分姉上が聞いたかったのはこちらの方だったのだろう。遅まきながらそう理解して、我は彼女に答えなおした。

「そう、ミユツケ姉様ったらまた貴方とひなたぼっこしていたのね」

姉上は私の脛を蹴ることを生きがいに行っている節はあるが、こういった背丈相応の可愛らしい言葉もよくお使いになれる。

が、本人にそれを指摘すると五発は蹴られる。というか実際蹴られたのでめったに指摘しないが。

「ご明察です」

「ミュツケ姉様はぼんやりしているけれど、そこまで無防備になるのは貴方という時ぐらいなもの」

我が代わりの言葉を口にする、姉上はそう返してため息をついた。

「可愛過ぎてごめんなさい」

ガスッ！　ため息をつきながら蹴られた。それも思いつきりである。

「それだけ気を許してるってことよ。まったく夕飯が無駄になったわ」

「つつう……ああ、もうそんな時間ですか」

痛みに耐えながら我が後半の言葉に反応すると、姉上は憮然とした表情で頷いた。

そんな表情をしているのは多分、我に対して甘い評価をしてしまったことへの後悔。そして我がそれを分かっていて流したことへの苛立ちゆえであろう。

……ミュツケ姉様が、我を信頼してくれているというのは、とても嬉しい事だと思う。

だが、それを素直に喜ぶ訳にはいかない。今回のように、それが原因で彼女が皆と一緒に夕食を摂れないというのは真に申し訳ないからだ。

我も姉様が大好きだが、だからこそ彼女を想った行動に出るべきなのである。

今度こそあのふかふかとした膝の誘惑には屈しまい。半分無理だと感じながら、我はそう決心した。

「そんな訳だから、貴方は早く居間にきなさい。そのおかしな格好と辛気臭い表情はやめて、ね」

人間の姿というのは、どうにも表情が分かり易くていけない。

姉上には私の考えがばつちり伝わってしまったらしい。そう指摘した彼女は、きびすを返しながらそう言つと、自分はさつさと歩いていってしまった。

「は、はい」

我は姉上に返事をしてから、気合を入れなおしてぽんと普通の青年へと変化する。

着物の入った棺桶の蓋を閉めて立ち上がると。

「おやすみなさい、姉様」

そう告げて障子を閉めた。

どらきま

我が居間に入ると、既にミュツケ姉様以外の家族は揃っていた。

「む……」

いきなり我を睨みつけるのは我が妹、アグノ・ザ・ドラゴンである。

「何か」

「ふん」

我が尋ねると、彼女はドラゴンノーズブレスを吐きながら顔をそらす。

年頃の女子は種族を問わず、年頃になると愛想が無くなるというから多分それだろう。更年期障害というやつだ。

更に食卓の上座には、一匹のたぬきが座っている。我とよく似た模様をしているが、毛艶は我のほうが上である。

「ミュツケは？」

「お亡くなりになりました」

「あら、ご愁傷様」

このとぼけたたぬきが私の母親、桂たま美である。父と別姓にしているのは深い理由があると昔言っていた気がするが、まあ特に知りたいとは思わない。

「フウ姉さん、挨拶が遅れて申し訳ありません」

そして我は最後に、部屋の隅で丸くなっていた我とも母とも形状が違う、毛むくじやらかな方に声をかけた。

「……別に、ポンがミュツケ好きなのは知ってるし」

すると彼女は、そっぽを向いたままそんな事をおっしゃる。

まずい、むくれている。

察した我は、まわりこんで彼女を見た。

「ね、姉さんを蔑ろにした訳ではないのです！ 我はこの家で姉さんの事を一番尊敬していますから！」

体長はたぬき時の我より一回り大きい程度。体は白と黒の縞模様の毛皮で彩られ、顔は猫のよう。しかしその牙は口を閉じていてもみ出すほどに長く、手足の先は龍の鱗で覆われている。

虎とドラゴンのハーフ。それが我が家で最年長の姉、フウ姉さんであつた。

彼女は背中についたドラゴンの羽をぴくぴくと動かすと、半眼で我を見る。

「本当に？」

「本当です！」

我が直立して答えると、彼女は「んっ」と顎を突き出して上半身をそらせた。

「じゃあどうすれば良いか分かるよね？」

「は、はい！」

そのポーズの意味を察し、我は彼女に近づいて一礼。

「よしよしよし」

そして姉さんの顎下を、愛情を込めて撫でた。

「うにゃ〜」

すると彼女は途端にとろけたような表情となり、相好を崩す。

我は数年前までは様々な姉様達に撫でられ続けていたので、相手が悦ぶ撫で方も一通りマスターしているのだ。

姉さんは猫科の血が混じっているせいか、やけに甘えん坊である。しかしこの家では長女ゆえ、素直に甘える事ができない。

その為こういった迂遠な態度を取ってしまうのだが、そこがまた愛しくもある。

「どう見ても尊敬してる態度じゃないんだけど……」

ぼそりと呟いたユマ姉上が、食卓の真ん中にサラダを置く。我が家の家事は当番制であり、今日の担当は姉上だったようだ。

……私の番は明日のはずである、多分。

「ていうか、アタシは挨拶すらされてないんだけどねえ」

母上が何やら愚痴っているが、まあ気にしないでおこう。

食卓には他にパンと羊肉のシチューまで置いてあり、先程まで我がすっかり忘れていた食欲を胃の底から思い出させた。

「いやあ、姉上の料理は相変わらず食欲をそそりますな」

「別に、簡単な物ばかりでしょ」

謙遜する姉上。彼女に我が胃袋の律動を見せてやりたい。我が姉上を賞賛すると、フウ姉さんがまた機嫌の悪そうな表情に戻ったので、我は夕食の準備が出来るまで彼女を撫でる事に集中する事にした。

撫でられ足りない、そんな表情のフウ姉さんを残した全員が食卓につくと、我々は一斉にいただきますと言って手を合わせた。

人間の神に祈る義理は無いし、ドラゴンの神に祈っても我々では効果が半分の気がする。

様々な紆余曲折があつたが、結局我々はどこぞの地域の風習に習い、こうやって食事を始めることにしていた。

「うむ、やはり姉上の作った物は最高です」

シチューを啜りながら我が感嘆の声を上げると、姉上は聞こえない振りをしてそっぽを向いた。

照れているのである。可愛いお方だ。

「アタシのじゃ不服だつて言うのかい？」

こちらはバツチリ聞こえていたらしい。我をじつと睨む母上。

「蟲やかえるの丸焼きは料理とは言いません」

それに目も向けず、我はシチューをすすりながらそう言い返した。会話をする時に相手の目を見ろという作法は、我が家では度々無視される。

「火を使うだけありがたいと思うんだね」

しかし母も譲らない。彼女は前足で器用にフォークを操ってサラダを頬張りつつ、我に応酬した。

まあ平凡なためきである母に、そこまで求めるのは酷というもの

だろうか。蟲やかえるも飽きるというだけでまずくはない訳であるし。

ユマ姉上とミツケ姉様が人間式の食事を我が家に取り入れてから、我の舌はすっかり贅沢者になった感がある。

当番制なのでもちろん食べるだけではない。我は姉二人に教えを乞い、作ることにしても今や第二の趣味と呼べるほどには拘るようになった。

フウ姉さんは……ちらりと彼女を見ると、姉さんは床に置かれた器の上に盛られた飯を、ガツガツと食っている。

彼女は我が家の食糧事情にあまり干渉しない。時折森の動物を狩ってきて、それが食卓に並ぶ程度である。

となると一番の問題は……考え、我はそのまま隣に座る少女に目をやった。

「な、何じゃ？」

意識したわけではないだろうが、彼女の台詞は我が居間に入ってきた時のモノと酷似していた。

なので我はふんと鼻を鳴らして「炭の固まりは食べ物とすら呼ばん」と答えてやった。

「そなたも炭にしてやろうか？」

「すみません。我にはそういった形からの復活はできませんので勘弁してください」

食事中に口をかつぱりと開ける無作法な妹に、我はテーブルの上に両手をつき深々と頭を下げる。

アグノは毎度火加減を間違えて作った料理を炭にするくせに、それでも毎回料理をしたがるのだ。

そしてそれを処理するのは、主に我の役目となる。

我が家において、我の立場は大層弱い。我をぼんと生んだ母上や、身なりは小さくとも我より年かさな姉上はまあいい。

しかし普通の家庭であれば唯一威張れるはずの相手である妹が、とにかく我を尊敬しないのだ。

アグノ・ザ・ドラゴンはヴォルガー・ザ・ドラゴンが作った子供達の中で、唯一の雌ドラゴンとの間に作られた純潔種である。

その為か妹の中には「ドラゴンとは気高く強く」といった旧式の哲学があるらしく、我はその哲学に著しく反する存在らしい。

我は確かに火も吐けないし空も飛べないが、羊肉を噛み切れる程度には丈夫な歯を持っているのだから、そのぐらいは敬ってくれても良いはずなのだが。

「おっと、このシチューはミユツケ姉様の物ですね」

「あ、ならばわらが食べようか……」

我がテーブルの端にあつたシチューに目を向けると、アグノが何か言おうとした。

「いただきますね。勿体無いですからね」

それに勘付いた我は早口でそう言つと、さつとシチューに手を伸ばし手元に引き寄せた。

そして天才的变化センスで頬袋をさつと肥大化させ、一口でシチューを皿ごと口の中に収める。

その間実に一秒である。

「あー！」

するとアグノが自らの哲学もどこへやらな声を上げた。

姉様の分まで平らげようとする意地汚さと言い、本来のアグノは気高さ、高貴さなどからは離れた性格をしている。

んべつ、と口の中から皿を取り出した後、我は

「あー、もしかしてアグノも食べたかったー？ ごめんねお兄ちゃん気づかなくてー」

そんな自分を偽る妹が不憫で、兄はたびたび本来の彼女を引き出すよう努力をしているのだが。

「炭になれ！」

「二人ともやめなさい」

激昂したアグノが変化を解きかけ、姉上がそれを制した。

我は熱々シチューで食道が大変なことになっているのを悟られぬ

ように、ゆっくりと水を飲む。

……うん、こんな事をやっているから、尊敬を集められないのか
もしれない。

どらとら

「ふいーごちそうさまでした」

夕食を終えた我は、背もたれに体を預ける。

そして人間が腰紐を緩めるが如く、変身を解き、たぬきの姿に戻った。

さすがにほぼ二人分も食べるとなると腹が苦しい。水風船のごとく膨れ上がった腹をさする。

「ぐぬぬ」

アグノが恨みがましい目でこちらを見てくるが、それもまた幸福感のスパイスである。

しかし我を睨んでいるのはアグノだけではなかった。

獣の手で器用に食事を終えた母上が、黒ぶちの中の意外と鋭い目で我を睨んでいたのだ。

「な、なんですか母上」

行儀の問題だろうか。そう考え我が姿勢を正そうとすると。

「ちよいとアンタ」

なんと母上がテーブルに乗り、それどころかそのまま私の元へと食卓を横断してくるではないか。これでは行儀も何もあったものではない。

唖然とする私の両肩を前足で固定すると、彼女はその視線を無遠慮に私の肢体に向けた。しかも重点的に見ているのは下半身である。我が全身の毛をビビビと総毛だたせていると、母がぼそりと口を開いた。

「……相変わらず、小さいキンタマだねえ」

私の頭が内外共に真っ白に染まっても、仕方のない台詞であったと思う。母親に自らの性器官の発育具合を指摘される屈辱、恥辱、やりきれなさは人間の諸君に伝わるだろうか。

「アンタ、たぬきってのはキンタマの大きさだよ。ツラが多少難ア

りでも、キンタマさえ大きけりやどうにでもなるんだから」

我の受けた衝撃を鑑みず、母は早口でキンタマキンタマとまくし立て始めた。

この母の元でグレなかつた事と姉様に十字架が効くことが、我が多少なりとも神を信じている理由である。

「母上、それは前時代の考え方です」

そんな品のない母上を、我は近代狸らしく静かに諭した。

だが母上の勢いは止まらない。

「そんなこたないよ。近所のみっちゃんだってキンタマしか取り得のないような男と結婚したし、この間だつて隣森の柊さんにアンタのお見合い写真持つて行つた時は好評だったけど、キン大を聞いたとたん断られたし」

「勝手なことをしないでください！　　というかキン大とはなんですか！？」

「男の良さは顔の良さ、甲斐性、キンタマの大きさの三Kで決まるんだよ」

「おかしいですたぬき社会！」

我はついに椅子から転げ落ち、悲鳴混じりにそう叫んだ。

たぬきのキンタマは、主に変身の為に使用すると言われている。

こういつた曖昧な言い方なのは、我がこの第二のお袋に頼つたことがないからだ。

一部タヌキはこれを被つてより大きな物に変化するというのが、おぞましいにもほどがある。

そういつた者は自らの未熟さをこのお袋さんに支えてもらつていゝる、自立のできない甘えん坊である。きつと後ろ足で立つ時も玉袋で支えてもらつてゐるに違いない。

しかし我は違う。我は後ろ足で立ちながらしのび足で後退することもできるし、変化にこのような小汚い器官を使うこともない。

こんな我の姿こそが一歩進んだ新時代のたぬきだと思ふのだが、世間はこれについて来られないらしい。

……あるいは、我が普段体内にキンタマを収納しているような奥ゆかしい種族、ドラゴンの息子であるからこんなことを考えるのかもしれないが。

「というか母上、貴方だって普段は奥ゆかしいキンタマをしている父上と子を為したのではありませんか」

キンタマへの考察中ふと気づき、我は体をいっぱい伸ばすと何とかテーブルにしがみつき、母に抗議した。

「アタシはほら、うるこフェチだから」

すると母は年甲斐もなく頬に両前足を当てると、いやいやとしないを作ってみせる。

「やぶへびとはこの事か」

何故こんな形で母の性癖を知らねばならぬのか。せつかく食べた夕食が胃の中で腐りそうである。

「ともかく我は、このキンタマ至上主義のためき社会に徹底抗戦いたします。第一我の半分はドラゴンなのですから」

「アンタにドラゴンの嫁さんができるとは思わないけどねえ」

息子がせつかく胸を張り孤軍奮闘しようとしているというのに、我が母は呆れたようにため息をつく。

孝行し甲斐のない母である。我が更に反論しようとテーブルに爪を立て、その上に登ろうとすると。

「食事が終わったからって、下品な単語を連呼しないで」

姉上が我の首根っこを掴み、ひょいと持ち上げた。母上も同様につまみあげられており、その下のテーブルを姉上はふきんで拭いている。

さて、では彼女がどうやって我々を持ち上げているかというところ……その秘密は彼女の影にある。

姉上の影。そこは屋内にあっても色濃くはつきりとしており、その中からはよろよろとしたものが這い出している。

それをたどって母の首元を見ると、カギ爪のような形の物が彼女を掴んでいた。この前は吸盤つきの触手であったし、今我の首を掴

んでいるぬるつとした物もまた別の形をしているのであろう。

姉上の影は、姉上の真の姿の一部をそこから限定的に生やすことが出来る。つまりこのカギ爪もぬめつとしたものも触手も全てが姉上の一部なのである。限定された、ほんの一部である。

「あ、姉上、我はキンタマという単語は二回しか出しておりません！」

我が抗議すると、姉上は無言で我に鋭い眼を向けた。

……よく見れば彼女の影からは、二本の角がにょきりと生えている。

これは多分抗戦すべき相手ではないな。我はそう判断して戦略的に口を閉じた。

「ユマ、お茶を取っておくれ」

「はいはい……うんしょ」

ぶら下げられたままの母上が指示すると、姉上は可愛らしく背伸びをして彼女にお茶を手渡した。

母上はそれを嘍ると、足をぶらぶらと揺らして、はぁーっと息を吐く。

「アグノ、我にもお茶を」

「そなたなどそのまま干からびれば良い」

急にのどが渴いた我が同じように妹に頼むと、先程まで我らのやり取りを呆れ顔で見ていた彼女はそんな冷たい事をのたまう。

我が家族は眼下のお茶と比べようもないほど冷たい。こんな時あの方がいれば優しくお茶を手渡してくれるのに。などと我が考えていると。

「ふああ、寝過ぎちゃった」

不意に居間の入り口から間延びした声が響いた。

「ミユツケ姉様！？」

「何い！？」

アグノの声に慌ててそちらを見ると、そこには確かに我が姉様、ミユツケ・ザ・ドラゴンが立っていた。

「あれ、ミユツケは死んだって聞いたけど」

「やだなあお母さま。わたし吸血鬼なんだから復活するよあ」

「あれから一時間も経っていませんよ!？」

「寝起きでいつも以上にのんびりと話す姉様に、我は驚愕のままつつこんだ。」

いくら吸血鬼と言えど、普通は復活に半日はかかるはずだ。ちなみに時間の単位はやはりあなた方の物を使っているのだから。ちなんー、だいぶ死に慣れたからねえ」

「慣れの問題なのですか!？」

「というか姉様、着物が思いきりはだけておる!」

更に追求しようとした我だったが、アグノの言葉で目を向いた。

姉様の着物には帯が巻かれておらず、はだけているというかもはや全ご開帳の様相を呈していたのだ。

深紅の着物の影が反射した肌は、死人のように白く、しかしどんな生者より瑞々しい。

胸から腹にかけてのラインはたわわに実るよりも曲線の美しさを優先させていたが、へそのくぼみは彼女の肌の柔らかさを想起させ、何者をも魅了する魔性の穴となっていた。そしてその下はといえば……。

「ポン太郎」

声と共に、私の視界が塞がれた。どうやら姉上が影から新たに出した手で、私の顔を覆いつくしたらしい。

それは磯臭い匂いを放ち、敏感な私の鼻をぎゅうぎゅうと押しつぶす。

「何をじつと見ているのえっち」

「みみみみてまふえん!」

「アンタはこういうのに欲情すんのかい」

「ひ、ひてまふえん!」

「最低なのじゃ」

「ぼぼぼぼぼ!」

必死で弁解するが、姉上が執拗に押しつぶしてくるので後半はもはや言葉にならない。

我が姉様を見ていたのは、二秒ぐらいである。いや、計算を間違えた。五秒ぐらいは見ていたかもしれない。

だがそれは美しいものを前にした生物としての当然の行動であつて、けつしてやましい気持ちがあつての事ではない。

「まあ、ポンちゃんてば、お姉ちゃんのこと大好きなんだから」
磯臭さで窒息しそうだった我の体を、側面から冷たくてやーらしい物が包み込む。

どうやらミュッケ姉様が姉上の手ごと我の体を抱きしめたらしい。だからといって苦しさは軽減されずむしろ肺の空気まで押し出され窒息寸前である。

誰か助けて！ と思つたら今度は反対側の手が我以上にもふつとした感触に包まれた。

ユマ姉上がしていた目隠しが外れ、これ幸いと我が隣を見ると、そこにはフウ姉さんが立っていた。
立っていた。そう、二足歩行で。

彼女はふさふさの毛皮に覆われてはいるものの、人間のような手足と胸には立派な双球を持つ半獣の姿に何時に間にか変身していたのだ。

姉さんは我を抱きしめながら言う。

「ポンは私のほうが好きつて言つてた」

「え、そうなのポンちゃん？ お姉ちゃんショック……」

「そ、そこまでは言つてません！」

「む……」

さりげなく我の証言を捏造しようとするフウ姉さんに反論すると、彼女は我ごとその証言を握りつぶそうとするがごとく、両の腕にぎゅうつと力を込めた。

「あがががが」

フウ姉さんは、世界最凶の魔物と名高いドラゴンと、地上最強の

動物と呼ばれる虎のハーフである。彼女が本気になれば、本当に我をぶちゆつと潰すなど容易い。

「いいもん。それならお姉ちゃんのこともっと好きになってもらうから」

もはや抵抗する気力もない我の首筋に、何かひゃっこい物が触れる。

「ミユツケ姉様、牙は反則だわ」

ユマ姉上が何やらミユツケ姉様を制しているようだが、段々と視界がぼやけていき、その内容もよく把握できない。

遠のく意識の中、アグノのヒスメリックな声が聞こえる。多分この期に及んで我への罵倒だ。

母はきつと、知らん顔でお茶を啜っていることだろう。

ああ、なんと麗しい家族愛。つまりこれが、我と我が家族達の標準的な暮らしである。

ぼんあぐ1

「アグノー。アグノー。出ておいでー」

「わーい。なんなのじゃ兄うえー？」

「今日は世界のべんきょうをするぞー。アグノはここがどこかわるか？」

「もりなのじゃ！」

「じゃあここは？」

「もり！」

「ここは？」

「もーりー！」

「よくできました！」

「えへへへへ」

「世界は大体が森だ！　むかしは人間が石で道を固めてらしいけど、今はちがう！」

「なぜなのじゃ？」

「いきなりあらわれた魔王が、一瞬で世界を森に変えてしまったのだ！」

「おー」

「森は石の道を叩き壊し、そして森からは魔物があらわれた！」

「わー」

「人間達は怒って魔王とけんかになった！　色々あって人間が一度は勝ったのだけれど、魔王はちょっとすると復活して、またけんかになったらしい」

「なぜなかよくできないのかの？」

「まったくだな。そんなわけで人間は今、森のないところでぎゅうぎゅうにつまって暮らしている。そして今も魔王とけんかをしているのだ」

「ねえ、あにうえ」

「なんだろうかわいい妹よ」

「まおうとにんげんがけんかしているとき、どらこんとたぬきはなにをしていたのじゃ？」

「まったくの不明だ」

カザブランという町は、我の（四本の）足で一時間程の場所にある人間の小さな集落である。

立地としては首都からも魔王の城からも離れた田舎町である。

だが、海に面した港町ということもあり、それなりの賑わいを見せている。

未発見の遺跡（数千年前に絶頂を迎えていた人類のものである）も多数眠っているという噂もあり、遺跡荒らしもとい冒険者や、それをカモにしようと道の左右に露天を広げる商人達が相まってこつた煮となっている。

町というのは除草の魔法結界を円形にかけ、足下から迫る森の進行を食い止めて形成するものだ。

しかし、この町では冒険者の落とす金を、ギルドの許可を得ていない商人が吸っているのか。それとも町長がケチっているのか。

それほど強い結界を維持することができず、道のあちこちに生えた雑草を抜くことが、子供達の良い小遣い稼ぎになっている。

「おうい、アグノー！」

時たま籠を背負った子供達が足下を通る。それを避けるたびバランスを崩しながら、我は妹に呼びかけた。

「何じゃ？」

振り向いた妹はもちろん人間の姿をしている。その顔は平素通り……と言ってはなんだが非常に不機嫌そうである。

十年ほど前まではこんな顔が基本ではなかったのだから。我は心の中で嘆息した。

「もう少しゆっくりと歩いてくれ。もしくはこの荷物を少し受け持

つてくれ」

我もまた、この町に入る前に人間の姿へと変化していた。一見冴えないけれどよく見るとハンサム。というトラブルに巻き込まれにくい絶妙な変化である。

しかし今の私の表情は困り顔。そして手にはいっぱい荷物を抱えていた。

「フン」

しかし妹は形の良い鼻からブレスを吐き、スタスタと先を歩いて行ってしまう。荷物を持ってもらう方は望み薄と判断して後者に回したのに、前者まで叶えられないとは。

妹の機嫌は今日も悪い。彼女がいたいけな市民に八つ当たりしては困るので、我は急いでアグノに追いついた。

「何を怒っているのだ」

「何故わらわがそちと買物など」

問いかけると、彼女は我に答えると言うよりは独り言を呟くような調子で愚痴った。

「仕方がなからう。ユマ姉上は小さいし、フウ姉さんは目立つ。ミユツケ姉様は日光に弱いしな」

ユマ姉上は、影を操れなければ見た目通りの腕力しかないし、フウ姉さんは人間と言い張れるような姿をお持ちではない。

気を抜かなければ大丈夫とはいえ、太陽と衆人が見ている中にミユツケ姉様を連れ出すのも危険である。

ちなみに我が家にも陽が射しているが、これはミユツケ姉様自身が所望したもので、除草用の結界も彼女が定期的に張っていた。

縁側が彼女のベストプレイスであることが示すとおり、吸血鬼でありながら彼女は日光の奴を愛しているのだ。それこそ身も焦がれるほどにである。

それを思うと今我をじりじりと焼く熱線がより憎らしくもなるが、我が姉様の膝の上でぽかぽかと眠れるのは奴のおかげでもあるので許してやろうと思う。

「母上は仕事だしな」

我が家の暮らし向きは、そのほとんどが母上が人間界で稼いだ金によって維持されている。

我や妹が大食いであることを考えると、毎月結構な出費だと思うのだが、我は特にひもじい思いをせずに今まで育ってきていた。

となると不思議なのは母上の収入源なのだが、母上は自らの仕事について明かしたことはなく、その働きぶりは息子の我にすら謎のままである。

見つかったらためき鍋にされるような職種でないことを祈るばかりだ。

しかしまあ、このあたりのことは妹も分かっているのだろう。彼女の言葉はやはり愚痴である。

そんなに我と買物物がしたくないか。荷物もちにすらならないのなら、一人で来れば良かったなどと、妹とは違い内心でつつましく愚痴る我。

だが、その前に腕のキャパシティが限界を迎えようとしている。

今日は我が家の備蓄食料、日用品などが一斉に破損、もしくは底をつき、必要な荷物が大量にあるのだ。

おかげで我は現在、皿を回しながら細い縄の上を往く、茶釜をかぶったためきのような曲芸を強いられている。

嘆くべきは人間社会の利便性に浸りきった自らの脆弱さなのかもしれないが、でもマジで便利なんだからこれら。

「なあ愚妹よ」

「誰が愚かな妹か!？」

「愚妹というのは愚かな私、その妹と言う意味で、お前が実際に愚かかどうかは関係ない」

「馬鹿にしておるとしか思えぬのじゃが？」

インパクトのある言葉で振り向かせたまでは良かったが、それが利き過ぎたようで妹はずんずんとこちらに詰め寄り、口の中の小さな牙を見せた。

「い、いや、そうではない。とりあえず昼食にしないか？」

その脅威に若干おびえつつ、我は誤魔化す訳ではないが妹にそう提案した。腕もそうだが我が腹も中々の疲労具合である。

「別に、かまわぬが」

叱り飛ばされるかなとひやひやしたが、妹は拍子抜けするほどあっさりと言った。

案外彼女も腹の虫をぐうぐう鳴らしていたのかもしれない。そう思うと愉快である。

「よし行こう。あそこにある踊るきつね亭の麺は最高だろう」

言って、我は妹を追い越し先を歩き出した。アグノは何やら暗い顔をしていた気もするが、まあ気のせいであろう。

ばんあぐ2 踊るきつね亭

踊るきつね亭は、店主の亡き妻がその由来となつた酒場兼宿屋である。

きつねのように細い目をした彼女は、いくら客が口説いても言葉巧みにそれを交わし、あべこべに一品余計に注文させたらしい。

まさか本当にきつねだったわけではあるまいが、もしかしたらという可能性をぬぐいきれない証拠物件がある。

「いらつしゃー……あれ、“ホン”太郎じゃん」

「そこまで言つたのなら「い」まで言え。まったくおまえという奴は」

それがこの、我がサルーンを開けて踊るきつね亭に入るなり、上記の失礼な発言をしたこの娘。

彼女こそがこの店の店主ときつね似の妻の娘であり、踊るきつね亭の二代目看板娘、ミヤゼである。

髪を後ろできつく縛っており、卵を逆さにしたような輪郭と、外側に引つ張られたつり上がり気味の目が確かにきつねを連想させる。我はこの店に半常連と呼べるぐらいには通っており、その際使う格好はいつも同じなので顔もすっかり覚えられていた。ちなみにホン太郎は世を忍ぶ偽名である。

「細かいこと言わないの。後ろは？」

「妹だ」

「あら似てない。ま、恋人つていうより説得力あるけど」

にやつと笑いながら、接客業にあるまじき暴言を吐き、彼女は我の後ろにいたアグノにいらつしゃいませと頭を下げた。

「う、うむ。くるしゅうない」

アグノは多少たじろぎながら、ミヤゼに対し何故か薄い胸を張つた。人間には媚びへつらわないという彼女なりの矜持であるらしい。しかしこんな薄汚れた食事処でそんな事をして滑稽なだけであ

る。その辺りの常識を学ばせるという意図も、今回の買い物にはあつたりしたのだが。

「とつても素敵な妹さんね」

ミヤゼがにつこり、妹を慈みの目で妹を見る。相手がこれでは、妹の社会勉強も望めそうにない。

「ふふん」

ふふんじゃない愚かな妹め。更に胸をそらす妹の更正は諦め、我はミヤゼに尋ねた。

「なるべく奥が良いのだが、空いているか？」

「え？ ああ今ひと段落したところだからね。そっちの隅へどうぞ」とするとミヤゼは少々不思議そうな顔をしたが、すぐに丸テーブルの並ぶ店の奥、寡黙なマスターのいるカウンターと反対側のまさしく奥の席を指さした。

礼を言つと、我はアグノを引き連れてそちらの席まで向かう。

そうして席に着くと、我は安い椅子をぎしとならしたため息を吐いた。

妹だの恋人だの。買い物をする度に同じやりとりを何度繰り返しただろう。この町の人間は、我が女連れであることがそんなに珍しいのか。

こんな事なら他の姿で買い物をするれば良かったと思わないでもない。が、なじみの客であれば色々と融通を利かせてくれるのが人間の店というもののなのだ。

この席を確保できたのもそうだし、肉屋でオマケしてもらえたのもそのおかげだ。

我ながらせいこいとは思うが、この顔はこの町で買い物をする時のサービス券（先程乾物屋のオバちゃんにもらったあれ）のようなもののなのだ。

まあ美形の妹、というオプションのほうが価値としてはバカ高いことも学習させてもらったが……。おかげでアグノが調子に乗って仕方ない。

「何か食いたい物はあるか？」

壁には変色した紙にメニューが張り付けてある。それを見ている妹に我が尋ねると、彼女からは「特に」と素っ気ない答えが返ってきた。

我がため息を吐いていると、ミヤゼが注文を取りに来た。

「ご注文はお決まりでしょうか？ アンタはどうせきつね亭そばでしょ」

「どうせとはなんだそれを一ついただこう。後は……」

失礼な店員に抗議しながら、我は妹に視線を送った。視線がうろうつろとしている所を見るとまだ迷っているのだろうか。

とりあえず我がお薦めのメニューでも教えてやろうかと口を開きかける。

「とりあえず、海鮮の叩きというのとケダ鳥の肉盛り、パン盛り合わせ、あとサラダ、それと……」

我の考えたとりあえずとはまるで違う量の注文を、アグノがずらりと並べだした。この店にあるもの全部と注文した方が早いのではないかという勢いである。

「ちよつと待て、待て！ 我が愛しの妹！ ひとまずそんなものだ！」

それに慌てた我は妹を制止し、細い目を丸くしているミヤゼにオーダーを締め切るよう促した。

買い物代は母上にいただいているが、昼食に関しては我の自腹である。我自身は決して裕福ではない。

「え、いいの？ この機雷魚の唐揚げなんかオススメだけど」

「いいの！ 即座に商魂出しよってからに」

先程まで驚いていたくせに、金が晄れそうだと踏むと即座に追加で一品薦めるミヤゼ。冗談ではないと我が断ると、アグノがポツリと呟いた。

「……唐揚げ」

妹の表情を見れば、まるで夢破れたかのような至極残念そうな顔

である。

「ではそれも一つ追加で！」

半ばやけになり、我はミヤゼ店員にそう告げた。

「まいどありい。いいお兄ちゃんね」

ミヤゼは細い目を線のようにして笑顔になると、あからさまに弾んだ足取りでカウンターへと向かった。

「まったく……」

あそこまで現金だと怒る気もなくなる。あのがめつい女が看板娘を名乗ってられるのも、そういうまっすぐさが評価されてのことだろう。

「……もしや、今のは頼み過ぎかの？」

妹は妹で、今さらそんなとぼけた事を聞く。

「まずはテーブルに乗りきる量を注文するのが一般的な作法だ。覚えておけ」

そう注意して、我は店内を見回した。

飯時から少々遅れたせい、店内はそう混み合っていない。

ピーク時に当たるときつね亭は町の住人と冒険者でこった返し、

ミヤゼ一人では手がまわらなくなる程に忙しくなるので、これはまあ僥倖といえるだろう。

二階は宿屋となっており、料金の割りに上等なベッドが用意されているのでこれもまた評判となっている。

我がそんな事を考えていると、ミヤゼが早くも一品目の料理を持つてきた。

「とりあえずサラダね。えーと……」

「ア、アグノ……じゃ」

「そう、アグノちゃん。すぐに次のお皿も来るから」

おずおずと名前を答えるアグノに、まるで彼女の新しい姉になったかのような笑顔で頷くミヤゼ。

彼女はテーブルにサラダを置くと、仕事に戻っていった。

「ふん」

アグノは得意の鼻ブレスを吐くと、サラダを引き寄せてがつつき始める。普段ならもう少し行儀良く食べるのだが、きっと照れているか慣れない人間界での食事で浮き足立っているのだろう。

我は頬杖をつき、それを微笑ましい気持ちで眺めた。

「な、何じゃ」

「いや、お前はそうしている方が似合うと思ってな」

「わ、わらわを子ども扱いするな！ わらわは高貴で偉大なドラゴ……」

大声で自らの正体をカミングアウトしかけたアグノに、我は人差し指を立てて注意した。

まるで色男のような私の気障な仕草に、アグノは言葉を飲み、それから眉根を寄せる。

なんだ兄に見蕩れたのか？ サービスでウイंकをしてやると、アグノがザシュツとサラダにフォークを突きたてながら睨んできたので、慌ててごめんなさいと謝る。

少々の沈黙の後、彼女は苦い表情のままぱつりと言った。

「昨日の事も、感謝などせぬからな」

「昨日？ ああ、アレか」

アグノの言葉で、我は昨日自分が危うく鍋にされかけていたのだと思い出した。我ながらどうかと思わないでもないが、我は過去を引きずらない性質なのだ。

「しかし何故お前が感謝する必要がある」

我が尋ねると、アグノはドラゴン特有の威圧感を發揮して我を睨んだ。

「とぼけるでない。あの人間の目当てはわらわであろう」

なるほど。あの人間がドラゴンを狙ってやってきたのだと聞いていたらしい。それならこやつでも気づいてしまうな。

我は観念してため息をついた。

ミュツケ姉様やユマ姉上は、一般的にドラゴンと言われて想起するような形態には変化しない。

フウ姉さんはドラゴンよりトラ成分のほうが大分高い。

我はドラゴンに変化することもあるが、あれ戦闘力皆無な見掛け倒しであるわけだし。

となると残る原因は、自然に目の前の妹のみとなる。

「この前の満月の晩、飛んでいる時に人間の悲鳴を聞いた。聞き違いではなかったのじゃな」

我のため息で答えを悟ったらしい。アグノは机を睨みながらポツリと呟いた。

魔物の活性化する夜中に森に入るなど、人間とは時たま不可解なことをする生き物だ。

そのせいで、ドラゴンの噂があゝの冒険者の耳にも届いてしまったのだろう。

とすればその噂は町中に響いていてもおかしくはない。我は周囲を見回し、ちょうどこちらのテーブルへ向かってきたミヤゼに聞いてみることにした。

「ヘイ、ウエイトレス」

「ヘイ、お客さん。追加注文？」

「追加注文はないが質問がある」

「追加注文がない人の質問には答えられません」

「この辺にドラゴンがいるという噂を聞いたことがあるか？」

「へ、ドラゴン？」

ふざけた事を抜かすウエイトレスに構わず我が質問をすると、彼女は呆けた顔を晒した。それが答えだ。

「知らんなら良い」

冒険者、町の住人。その両方がそれなりに利用するこの店の看板娘が知らぬのなら、この話はまだこの町に浸透していないのだろう。ふふふ、うまく情報を引き出すことができた。我がほくそ笑んでいると。

「この羊のシチューを所望するのじゃ」

「りょうかい」

「こら！」

妹が勝手にミヤゼへ追加注文していた。我が取り消そうとする前に、ミヤゼは体をくると躍らせるとテーブルから離れていった。

「勝者の余韻をどうしてくれる。というか羊のシチューは昨日食べただろう」

「食べ比べじゃ」

「あまり高貴な趣味と言えんぞそれは。というか」

「何故わらわを庇った」

我がそこから流れるように別の話題に転じようとした所で、アゲノがぴしゃりと話を前の前の話題へと戻した。その目には我を射抜くかのようなドラゴンの威圧感が灯っている。

「お、お前を庇った訳ではない。その、脅すのに失敗しただけだ」
その眼力から逃げるように視線を一旦そらす、そのまま目を離している和不意に噛み付かれそうで、またそちらに視線を戻す。

戻すたびに妹の視線が厳しくなっているような気がして、我の狼狽はどんどん大きくなっていった。

「あの人間に言った、頭の葉っぱが飛んでしまったという理由かや」
そんな我を嘲るように、アゲノが小さな牙を見せて笑う。

「わらわはそなたが変化に葉っぱを使うところなど、見たことないのじゃ」

その通り。我が変化をするのにあのようなものは必要がない。あいつたものが必要なのは、たぬきの中でも老人か赤ん坊ぐらいのものである。

「……盗み聞きなどドラゴンの所業ではないぞ」

完全に逃げ道を塞がれ、我は苦し紛れにそう呟いた。しかしアゲノはそれを歯牙にもかけず、更に強い視線で我を睨みつける。

「何故、わらわに黙ってあのような事をした」

「……知ったらお前は気にするだろう。飛ぶことを遠慮する」

「そんなこと、ないのじゃ。というかわらわが飛ぼうが飛ぶまいがそちには関係あるまい」

アグノは一瞬言葉を詰まらせた後、我にそう切り返した。その言葉で、我もまたぐつと喉が詰まる。

確かに妹が飛ぼうが飛ぶまいが、私の生活には影響がない。という飛ばない方が平和に暮らせるというものである。

しかし、だが、それでも、である。色々と頭の中で理由を並べたてて、我はようやく言葉を搾り出した。

「飛ばないと勿体無いだろう。お前はドラゴンなのだから」

しかし、それを言った瞬間、そういう事を言いたかったのではないと、心の内から声がする。何やら胸に穴が開き、そこから流れ出た良くないものが胃に流れ込む感触がした。

空っぽの胃に突如流れ込んだ不快感に、我が座りを悪くしている。

「そなたとてドラゴンじゃろう！」

アグノがやおら立ち上がり、机に手を叩きつけると我に向かってブレスを吐くかのような勢いで叫んだ。

あまりに急な出来事に、我はぽかと口をあけることしか出来ない。

「それを……それを……」

そんな我にいつそう怒りが蓄積された様子のアグノの体が、ぶるぶると震えた。そして蓄えられたそれを即座に解放。

「それをあのような人間にヘコヘコしておって！ そなたにドラゴンの矜持はないのか！？」

アグノは怒りの咆哮を放った。

彼女の剣幕と、その発言の内容に、私の頭がぐわんと鳴った。

ドラゴンの矜持？ そんなもの、我には……。言い返そうとしたが言葉が出てこない。口をパクパクと動かす我。

「どつたの？」

隅とは言え、これだけ大声を出せば目立つ。盆を持ったミヤゼが何事かとこちらに向かってきた。

「あ、あ、う、な、なんでもないなんでもない」

ようやく硬直が解け、我は彼女に対し必死で誤魔化す。

アグノもさすがに注目を集めていることに気づいたらしく、大人しくなつて椅子に座りなおした。

「アグノちゃんのこと、いじめちゃダメよ」

なぜ我が一方的に悪者になるのだ。と、アグノを見るとこれがまたシユンとした顔をしている。

「はい、アグノちゃん。これ食べて元気出してね。アンタにもほら、これ食つて反省しなさい」

ミヤゼがアグノと我の前に、それぞれきつね亭そばを置いた。

頷いたアグノはそれをひと口で吸いつくすかのような勢いで啜り始める。

何なのだ一体。混乱した胸のうちに呟いて、我もまたそばをかつ込み始めた。

ばんあぐ3 キンカマクラ

我は荷物を持つ腕よりも若干重い足取りのまま、妹の後ろを歩いていた。

頭には妹が言った、ドラゴンの矜持という言葉が廻っている。

諸君はそろそろお気づきかもしれないが、我という存在は見かけ、性格共にほばたぬきである。いや、変化が普通のためきより得意という以外は、まったくもってたぬきと言って良い。

我もそれに悩み、幼い頃は辛いものを食べ口から火を吐こうと試みたり、羽が生えないかと高い所から飛び降りてみたりしたが、一向に効果がなかった。

一緒に練習をした妹はすぐにそれらをこなせるようになった為、その特訓もいつしかしなくなってしまったが。

こんな我がドラゴンのプライドなど持って良いのだろうか？ それはとても不恰好ではないだろうか。そして、滑稽では無いだろうか。

やはり母の勧めどおりたぬきの嫁でももらった方が良いのだろうか。

しかしあのキンタマしか評価しないような生き物と一生暮らしていくなど、耐えられそうにない。大体なぜキンタマなのだ。

ぶつぶつと考えながら歩いていると、前を歩いていたはずのアグノと並んでしまった。彼女は顔を横へ向け、足を止めている。

我が不思議に思いその視線を追うと、そこには露店があり、でんと黄金色に輝く枕が置いてあった。

商品名を見るとキンタマクラと書いてある。なんと妹もキンタマ至上主義のキンタマニアだったのか。

我が目を剥き商品の説明をじっと見ると、それはキンタマクラではなく、金貨がぎっしり詰まっているような重量感と音がする、キンカマクラという代物だった。

なんとも眠りにくそうな枕である。我はそう考えたのだが、妹はそうではないらしい。彼女はその商品に釘付けとなり、まるで動く気配を見せない。

「まさか欲しいのか？」

「そんな訳ないのじゃ」

尋ねると、アグノは激しく首を振りながらそう言った。

コクコクコクと、縦に。

「我が妹ながら不憫な奴だな」

「ぐ、ぐむ」

口から出ている言葉と実際の行動が、まるで逆になっている。いや、動きの激しさからすると口以外の細胞はすべて彼女を裏切っているといっても過言ではなからう。

それを指摘すると、アグノは喉の奥でプレスが詰まったような声を出して顔を赤くした。

——ドラゴンという生き物は、おおそ二種類に分ける事ができる。

谷などで群れて暮らし、関わろうとしなければ一生他の種族と関わらず、それらを見下し引籠もり続ける高慢なドラゴン。

そして金、宝石、女、この世のあらゆる物を手に入れ、自らの巢でごろごろとする事を至福とする強欲なドラゴンである。

どちらも極端にどうしようもないが、妹は全力で前者の方を目指しているらしい。しかし非常に残念な事に、彼女の性質は完全に後者寄りなのである。

「買って帰るか」

「わ、わらは別に欲しいなどと……」

「勘違いするな。姉様方にプレゼントするのだ」

尚も意地を張る妹にそう答え、我は荷物を妹に押しつけるときんちやく袋を取り出した。

「お、重いのじゃ！」

今の彼女は、人間相当の力しかない。悲鳴をあげるアグノを背に、

我は少々感傷的になった。

——我はアグノに、自らの本能に従って生きて欲しいと思っている。せつかくドラゴンらしく生まれたのだから、思うまま自由に生きるべきであろう。

あるいはそれは、自らがまるでドラゴンらしくない事から発する代償行為かもしれない。冒険者として大成できなかった人間の親は、子供にも冒険者になるよう教育を施すことがあるという。

そういつた夢という代物の押し付けが、我の行為には含まれているのは確かであろう。

「わ、わらわに荷物を押し付けておいて何をぼんやりしておるのじや！」

妹が先程怒ったのも、多分そういう理由だ。自分はそんなこと頼んでいない。自分の生き方は自分で決める。もつともだ。

「ま、プレゼントするのは姉様方にだが、彼女らが気に入らなければ、お前にも廻ってくるかもしれないな」

何やら抗議しているアグノにそう告げると、彼女はパアッと後光も射さんばかりの笑顔になったが、慌てた様子でそれをぶーたれた顔に戻し、更には荷物が崩れかけててんやわんやとなった。

こつそり彼女を盗み見た我は、その姿を大変微笑ましく思う。

確かに我の行為は不純な動機が元かもしれない。しかし我は妹のこういつた表情や、目を輝かせて食べ物にがつく姿、そして月に浮かび上がる雄大なドラゴンのシルエットを縁側から眺めるのが、たまらなく好きなのだ。

それこそ我のなけなしのプライドに引っかかり、口に出すことは一生ないだろうが。

そんな訳で、我は妹にその珍奇な品物を買ってやることにした。

目の前で我々がごちゃごちゃと話しているというのに、露店の主は気づかずにキセルをふかして胡坐をかいている。

我は腰をかがめ、店主に呼びかけた。

「店主、この枕はいくらか」

「え、これを買っんですかい？」

「自分で売り出しておいで客が来たことに驚くな」

我に気づいた店主は口からキセルを話すと、呆けた顔で我を見た。需要が無いのは我にも分かるが、これでは何故売りに出しているのか分からなくなる。

「へえ、百バイトになりやす」

「む、高いな」

一般的なドラゴンハーフたぬきの一食分（きつね亭そば一杯）が三バイトである。

いくら一日の三分の一ほどを受け持つ枕と言えど、それでは同じく一日三食の一角を担うきつね亭そばに対して失礼というものだろう。

値切ろうと決めた我だったが、そばの味と共に思い出した記憶があった。

きつね亭で、すっからかんになったきんちやく袋を涙ながらに振った悲しい記憶である。そしてそれは、ついさっきの出来事であった。

つまり今我の手持ちは……。

「零バイトにまからんか」

「旦那。寝言は寝てから言ってくだせえ。九十バイトでいい枕をお譲りいたしやすよ」

我がきんちやく袋をもみほぐし、その中に銭も玉も入っていないことを確認して店主に交渉すると、彼は哀れんだ目をしてほんの少しの優しさを見せてくれた。

「……もしかや手持ちが足らんのじゃ？」

妹が間違った語尾の使い方をしつつ、冷やかな目で我を見る。

それをちらりと確認した我は、冷や汗を流した。

まずい、このままでは兄の威厳が地の底まで落ちてしまう。もう既にプライド無しのへこき虫扱いだが、怒られたという事は期待もしているということの裏返しのはずだ、多分。

ともかく現状を打破する良い方法は無いかと我は頭をひねった。

「……うーむ」

「と、とにかくこの荷物を、持ち直してから考えるのじゃ……」

そして、アグノが悲鳴を上げたタイミングではっと思いついた。

「こうなったら、仕事場に給料前借りに行くぞ！」

我は握り拳を作ると、アグノのほうへ向き直りそう宣言した。

「ま、前借り！？ 先程そちの矜持について説教をしたばかりであるうが！」

「ええい！ 前借りができるということは我が信頼を築き上げてきた証だ！ 恥じることなど一つもない！」

我は荷物を支えていたアグノの手を取ると、信じるとばかりに強く握ってみせた。

「そ、そのような詭弁に騙されるか！ わらわの目が黒い、内は、そのような事絶対に許さぬ……ととと」

片手で荷物を支えるアグノが、裏返った声を出す。そのまま彼女はバランスを崩しかけ、荷物を体で抱え込む。

「行くぞ！ 目指すは武器屋のガッツ&ガンツだ！ あ、その枕は取り置きしておいてくれたまえ！」

「へーい」

「ちょ、ちよつと待つのだじゃ！ 本当にコケる！」

どうせ売れませんよとでも言いたげなやる気のない店主の返事を背に、我は妹の手を引き、自らの勤務先へと走り出した。

ばんあぐ3 キンカマクラ（後書き）

次回の更新は1／13辺りになると思いますのでよろしければお付き合いのほどを。

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0680ba/>

どらぽんっ！～ドラゴンたぬきのポン太郎

2012年1月10日00時50分発行